

# 『平家物語』の俊成歌について——古歌の問題と関わって——

檜垣 孝

はじめに

語り本系の『平家物語』には藤原俊成（一一一四—一二〇四）の和歌が一首とられている。但し、作中に俊成が登場して和歌を詠むのではなく、九州まで落ちてきた平家一門が宇佐神宮に参籠するという出来事が語られる部分に、宇佐神宮より夢想の告を受けた平宗盛が俊成歌を口ずさむという形にとられている。すなわち、寛一本によれば卷八「緒環」の章段に、

七日参籠のあけがたに、大臣殿の御ために夢想の告ぞありける。御宝殿の御戸（も）をしひらき、ゆゝしくけだかげなる御こゑにて、

世のなかのうさには神もなきものをなにのるらむ心づくしに

大臣殿、うちおどろき、むねうちさは（わ）ぎ、

さりともとおもふ心もむしの音もよはり（も）はてぬる秋のくれかな

といふふる歌をぞ、心ぼそげに口ずさみ給ける。さて太宰府へ還幸なる。<sup>①</sup>

とあるのがそれである。八坂本では卷八「太宰府落」の章段で、「さりとも…」歌の前後は、

おほい殿うち驚き胸さはきこはいかなるへしとも覚させ給はず古歌なりけれともかゝるおりふしを思出給ひて

さり共と思ふ心も虫の音もよはりはてぬる秋の暮哉  
柳の浦に内裏作らるへしなんときこえしかとも<sup>②</sup>

となつてゐる。この歌は、俊成が保延六年（一一四〇）、七年のころに詠んだいわゆる「述懐百首」中の一首で、私家集『長秋詠藻』に収められている（二五三番）。保延六年は俊成二七歳の年にあたる。また、自身が撰者となつた『千載集』第五卷秋歌下にも入集させていて、

保延のころほひ、身をうらむる百首歌よみ侍りけるに、むしのうたとてよみ侍りける

皇太后宮大夫俊成

さりともおもふころもむしのねもよわりはてぬる秋のくれかな<sup>(3)</sup> (三三三)

となつてゐる。『平家物語』では、俊成歌であるということには全く触れないで大臣殿(平宗盛)が口ずさんだ「ふる歌」(「古歌」)として利用されている訳である。物語内に和歌があるのは当然のことと思われるが、散文と韻文という区分けをすると、物語に和歌がとりこまれる現象をどうとらえるかという問題は和歌研究の一つテーマである。本稿はこの俊成歌について、どのような役割を担わされて『平家物語』にとられてゐるのか、古歌とされているのはなぜかといったこと

を中心に考察してみようとするものである。

—

最初に『平家物語』諸本における俊成歌の異同について確認しておきたい。『平家物語』を考察の対象にする場合、諸本間の異同の問題は避けて通れない問題であるし、当該歌あるいは当該歌を含む前後の物語にも異同があるところで、すでに多くの先行論文がある<sup>(4)</sup>。先ず諸本における俊成歌の有無について、『平家物語』一九諸本を対象に和歌の有無の一覧表を作成されている鍛冶光雄氏の御論により、「さりととも…」歌前後数首についての表を引用してみる<sup>(5)</sup>。「さりととも…」歌の有無についていえば、ほとんどの諸本に有るが、語り本系では百二十句本(斯道文庫蔵本)が欠巻なので不明である

番号	和歌	分類	闘	四	南	延	長	盛	屋	平	竹	鎌	百(斯)	百(国)	覚	高	加	国	葉	下	流
63	分て来し	懐旧・述懐		(				○		○	○	○		○	○	○			○	○	○
62	恋しとよ	懐旧・述懐	○		○	○	○	○		○	○	○	(	○	○	○	○		○	○	○
61	月を見し	懐旧・述懐	○	卷	○	○	○	○	○	○	○	○	8	○	○	○	○		○	○	○
60	さりととも	懐旧・述懐		8	○	○	○	○		○	○	○	欠	○	○	○	○		○	○	○
59	世の中の	示現		欠	○	○	○	○	○	○	○	○	)	○	○	○	○		○	○	○
58	住なれし	懐旧・述懐	○	)	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○		○	○	○

のと欠巻ではないが屋代本に無く、読み本系では四部合戦状本が欠巻なので不明であるのと欠巻ではないが源平闘諍録に無いということがわかる。鍛冶氏は、引用したこれらの和歌を平家の運命流転の和歌と位置づけ、

「九州、八島の流浪の平家」の運命流転の和歌のうち、63・64の二首は増補系においては、「盛」のみであり、語り系の祖本といわれる「屋」では欠いている。「屋」は60の古歌も欠いている。ところが、この間の「懐旧」の和歌、58・61は全諸本に共通して挿入されており、62の和歌については「屋」のみ欠いているだけである。この事は、「流浪の身にある平家」の運命流転の世界は「屋」以降語り系において生長したものであり、古態の諸本においては、「流浪している平家」は昔の栄華を懐しむ世界の方が強く展開されていた事を示すものとして注目される。

と述べ、『平家物語』諸本における内容構想の成長展開に目を向けておられる。

次に、「さりともと……」歌の物語内での場所の異同については、富倉徳次郎氏が、

この歌『千載集』秋下に「保延のころほひ身を恨むる百首の歌よみ侍りける時虫の歌とてよめる」と詞して皇太后宮大夫俊成の歌として載る。『長秋詠藻』にも載る。すなわち俊成の歌を口ずさんだわけであるが、『延慶本』

『屋代本』『闘諍録』など古形を示すと思われる諸本ではここにはこの歌を載せない。『延慶本』に「此後ゾ大臣殿ナニノ憑モヨワリハテラレケル」とあるが、このような形が俊成歌引用を導いたのであろうか。この歌は『延慶本』『長門本』では柳浦で虫の音を聞いての宗盛の述懐で、特に宇佐の神託との連絡はない。それが古態であろう。<sup>(6)</sup>

と解説されているように、読み本系は語り本系とそのとられた位置が違っている。富倉氏も諸本の成立の前後問題にまで踏み込んだ考察をされている点に注意しておきたい。以下に読み本系の本文を一例引用し、語り本系との違いを確認しておきたい。すなわち、延慶本を例にとると、

御神馬七疋引せ給て七ヶ日御参籠あて旧都還幸の事被二祈申一けるに、第三日に当る夜の夜半に神殿をひたゝしく鳴動して良久有て御殿の中より気高御声にて歌あり、世の中の宇佐には神もなき物を心つくしになに祈らん

此後そ大臣殿なにの憑もよわりはてられける、此を聞給けむ一門の人々もさこそ心細く覚されけめ、各袖を絞りつゝ泣々還御成にけり、

(中略)

又緒方三郎十万余騎にて寄すると聞へければ、山賀城をも取る物も取あへず高瀬船に棹して終夜豊前国柳と云所

へそ落給にける、河辺の叢に虫の声々弱りけるを聞給て  
大臣殿かくそ思つゝけ給ける、

さりともと思ふ心も虫の音もよわりはてぬる秋のゆ  
ふくれ

彼所者地形眺望少故ある所也、楊梅桃李引殖て九重景  
氣被ニ思出一ければ是にはさてもなむとそ思あひ給  
ける、<sup>(7)</sup>

となつてゐる。中略以前の部分は卷八「七、平家人々宇佐宮へ  
参給事」の章段で、宇佐神宮参籠と神託を受け落胆して太宰  
府へ帰る部分、中略以後は卷八「十二、緒方三郎平家於九国  
中を追出事」の章段で、平家一門が再び源氏方に追い立てら  
れ太宰府から山賀城へ山賀城から柳浦へと落ち延びたところ  
の描写である。「かくそ思つゝけ給ける」という表現につい  
ていえば、「かく」は「さりともと…」歌をさしてはいるが、  
宗盛が思い続けた歌が古歌であるのか彼自身の歌であるのか  
の判断は難しい。文面に「古歌」云々の文字がないので、と  
りあえずは宗盛の述懐歌だと理解しておきたい。延慶本では  
「さりともと…」歌は、宇佐神宮ではない別な場所・柳浦で  
宗盛によって詠まれたものであるということ、古歌としては扱  
われているということの二点で、語り本系とは大きく違つて  
いるということになる。以上を一覧表にして整理すると次の  
表のようになる。<sup>(8)</sup>

「古歌」とす るもの	語り本系…覚一本・葉子 十行本・流布本・八坂本・ 百二十句本・鎌倉本 読み本系…南都本	宇佐神宮で神託を受けて 口ずさんだ歌とするもの
「古歌」の文 字のないもの	読み本系…源平盛衰記	柳浦で虫の声を聞いて 詠んだ歌とするもの

結局、宗盛が口ずさんだ「さりともと…」歌を、宇佐神宮  
より神託を受けた場面でのものとし、かつ古歌とする点で語  
り本系諸本は一致し、読み本系諸本にはそうでないものがあ  
る、つまり揺れがあるということが判るのである。こうした  
違いが、屋代本と源平闘諍録に歌が無いということと相俟つ  
て諸本成立の前後問題と大きく関わるのであろうということ  
は想像に難くなく、俊成歌に言及するものの多くがその問題  
を論じられていて語り本系の方が『平家物語』の構想として  
は新しいというのが大筋のようである。論者の興味は俊成歌  
がなぜ古歌としてとりこまれていのかということとところにあり、  
小論は諸本成立の前後問題を論じようとするものではないが、  
実は俊成歌はその有無やとられた場所の違いによって諸本の  
成立が問題にされるといふ、重要な位置を占めている歌でも  
あったのだということは再確認しておきたい。

さて、語り本系諸本において俊成歌が古歌とされている問題について考えてみたい。『平家物語』に「古歌」があることやその意味について考察されたものとして、まず久保田淳氏の御論をとりあげたい。氏は日本古典文学大系本により『平家物語』と『太平記』の中の和歌をその作者によって分類した一覧表を次のように作成されている。<sup>9)</sup>

種別	平家物語	太平記
登場人物の個人詠	八〇	五二
古歌	六	二二
神仏の示現の歌	五	五
落首	九	二五

そして、この一覧表の結果を考察され、

太平記において個人詠が減退し、古歌の引用と落首とが大幅に増大することは、軍記物の展開における両者の位置を考える際に、暗示的である。即ち、これらの数字は、和漢の故事を豊富に引いて説くことによつて啓蒙の手段としようとする、軍記物一般の傾向や、諷刺性が、平家物語においてはなお希薄で、太平記においてひどく強化されていることを物語るのである。

8	14	44	63	88	93
二	三	六	八	一一	灌頂
阿古屋之松	少将都婦	葵前	緒環	劍	女院出家
みちのくの	ふる里の花の物いふ	しのぶれど	さりとともと	八雲たつ	郭公
古歌	古歌	古歌	古歌	素盞鳴尊	古歌
出典・参考文献	古事談・第二臣節、夫木・卷二九・松一題不知 よみ人しらず(下句「いでたる月のいでやらぬかな」)	後拾遺・春下・一三〇 世尊寺のもの、の花をよめる 出羽弁	拾遺・恋一・六二二 天曆の御時の歌合 平兼盛	千載・秋下・三三二 保延の比をひ身をうらむる百首歌よみ侍りけるときむしのうたとよみ侍ける 皇太后宮大夫俊成、長秋詠藻・上・述懐百首	新古今・夏・二四四 だいしらず 読人不知、和漢朗詠・夏・橘花

と述べておられる。『平家物語』に古歌が六首とられているということと、『太平記』のほうに強くいえることだとしながらも「啓蒙」と「諷刺性」に古歌の役割あるいは意味付けを見出しておられるということが重要な指摘としてある。久保田氏は、後に、同じく「平家物語と和歌」と題して、『平家物語』(寛一本)にとられた和歌の作者、および出典・参考文献の一覧を作成されている。以下に一覧表から古歌とされたものを抄出引用すると、<sup>10)</sup>

となる。出典・参考文献の欄によってみると、8番歌「みちのくの…」はよみ人しらず歌であるが平安中期の歌人実方にまつわる説話中の和歌、14番歌「ふる里の花の物いふ…」の作者出羽弁と44番歌「しのぶれど…」の作者平兼盛も平安中期の歌人、88番歌「八雲たつ…」の作者素盞鳴尊は『古事記』『日本書紀』に出る神話上の人物であり、93番歌「郭公…」はよみ人しらず歌であるが『和漢朗詠集』に既にとられていたので、いずれも「古さ」という点では古歌に相応しいといえる。それらに比べると63番歌「さりともと…」だけが源平争乱時代に同時代人として生きている俊成の作であり、古歌といえるかどうか疑問であり注目せざるを得ない。

同じく『平家物語』における古歌の問題について関心を持たれた弓削繁氏は久保田氏前掲論文を引用しながら、読み本系の延慶本・長門本・源平盛衰記の三本にとられた古歌（古歌説話）の出典・参考文献の一覧を作成され、古歌の引用のされ方の類型とその役割あるいは意味付けについて、久保田氏説に付加するという立場で、

結局、①古歌のみを引く場合、当時人口に膾炙していた名歌がほとんどで、特に文献に照すまでもないものがある。②そして、その名歌も、何らかの説話や伝承を伴ったものが多い。③古歌説話の引用も多く、話をダイジェストしたり変形したりして取込む場合も見られる。④明らかに書承と考えられる古歌説話も多分に見られる。⑤

古歌や古歌説話を取込む場合、何らかの形で本筋の話と関連づけるという傾向が見られる。等のこと可言えよう。なお、既に述べた通り、久保田氏は古歌の取込みに啓蒙の意味を汲みとられたが、加えて、読者の説話的興味に応えるという意図と、やはり読者層の知的要求の反映としての源氏物語等先行作品への志向とが見られよう。特に延慶本や盛衰記が説話の世界と一脈を通じている点は、今後注目されてよい問題であろう。<sup>(11)</sup>

と述べておられる。また、古歌の認定に関しては、古歌の範囲については、便宜的に、平忠盛が昇殿を許された長承元年（一一三二）（百練抄）で線を引いたが、稀にはそれ以後の歌が本文中で古歌として扱われている場合等もある。こゝではそれらも含めることにした。<sup>(12)</sup>

と述べておられる。保延六年（一一四〇）ころの作である俊成歌は、古歌と認定される範囲外にあり、また例外としても認められなかったからであろう、一覧表にはとられていない。古歌の認定ということであれば、先の久保田氏の御論に「和漢の古事を豊富に引いて説く」と述べられた「故事」そのものが「古さ」の概念に支えられ伝承されるものだといえよう。俊成歌は「古さ」という点では古歌に相応しいものとはいえない。『平家物語』の作者あるいは作者たちと現代人の我々とは古歌の認定のしかたに相違があるのであろうか。次節では、俊成歌はなぜ古歌であり得るのかを検討してゆきたい。

さて、俊成歌は古歌として物語内でどのような意味を持って働いているのかを考えたい。物語にとられる以前の一首の和歌としては、俊成歌は二七歳のころに詠んだ「述懐百首」中の秋の部の「虫」題の一首として詠まれている。それが初出である。前引したが、『千載集』にも入集して語句に異同はない。「述懐百首」は全歌身の不遇を訴え嘆くという姿勢で貫かれている特異な百首歌である。この歌も「虫」題で詠まれた題詠歌ではあるが、内容的には実情歌である。二七歳のころの俊成が身の不遇を託っていたことはよく知られているところであるが、自身が撰者となった『千載集』にも第五巻秋歌下に入集させていて、その詞書に「身を恨むる百首歌詠み侍りける」とわざわざことわっていることから、後年になっても俊成自身そのような作として読んでほしいという意図を持っていたのだと考えられる。『平家物語』では語り本系の場合、宇佐神宮より夢想の告を受けた平宗盛が俊成歌を口ずさむという形でとられている。見方によっては宇佐神宮よりの神詠を受けて宗盛が古歌でもって返歌をしたようにもとれる。ただし、この二首を贈答歌としてみようとしても、俊成歌には贈歌（神詠）と重なる語句は一つもないのでいわゆる贈答歌の約束事が正式にはたされていない。<sup>(12)</sup> わずかに初句から二句にかけての「さりとともと思ふ心」が宇佐神

宮の託宣の内容を受けた表現と読めて、そのことで二首が関係あるものとされたのであろうと知れる。神より平家一門の立つ瀬はないぞと諭されたのに対し、そうはいうもののかんとかしたいと思う一方、気を強く持とうとする思いも弱りゆく虫の音とともに萎えしぼんでゆくようだと嘆く、宗盛の内心に去来する矜持と絶望感とを古歌でもって代弁させようとした。それが『平家物語』の手法であった。ただし、俊成歌の本来的に持っていた身の不遇を恨むという内容は無くなっているといわざるを得ない。俊成歌であるはずの存在根拠が無くされ、俊成歌としての個性がはずされているといっているであろう。

視点を変えてみると、当該歌を古歌とする積極的な理由が物語の側の論理と和歌の側の論理との両方から導き出すことができる。例えば、平家の宇佐行幸の史実性に目をむけられた杉本圭三郎氏の、

ここ（注・竹前国那珂郡岩戸）から豊前国（大分県）の宇佐八幡宮に行幸し、七日参籠して、太宰府に還幸した、ということは、その距離と平家が九州にあった期間とからみて、史実とは考えられない。しかし、八幡宮の神託は、終末を予告しながら叙述をすすめる叙事詩の特徴をしめすものである。「屋代本」の宇佐行幸は、緒方三郎惟義に追われて平家が太宰府を落ち、豊前国柳浦に来てからのこととしており、このほうが妥当な叙述である。<sup>(13)</sup>

という解説は、覚一本が『平家物語』の目指す構想と深く関わって叙述されていることを示唆されたもので、結果的に「さりとも」と「歌が物語内で読み解かれるべき内容を指し示されてもいるし、時下米太郎氏の、

「宇佐行幸」の章で内大臣宗盛が八幡の御夢想を蒙つて打驚き。

さりともと思ふ心も虫の音も弱りはてぬる秋のくれかな。

と心細げに口占んだ事など、何れも古歌の古典的価値を尊信して、之れを神聖な場面に引用してゐる事が分る。<sup>(14)</sup>

といった解説や、小松茂人氏の、

「さりとも」と「歌は」俊成の述懐である。ところで、作者不明の前歌を神の啓示とし、この世紀末的な憂愁感の漂う俊成の歌をこれと対応させると、いかにも故郷を失った平家の絶望感が実感をもって迫って来て、享受者の哀感を誘う効果をもたらすのである。<sup>(15)</sup>

といった解説は、ともに「さりとも」と「歌を一般的かつ普遍的な内容として読み解いておられるという点で示唆的である。つまり、物語の側からいえば、個人の和歌を古歌とすることで、話の進行に都合よいように和歌の内容を変えて利用できる」とする論理が働き、和歌の側からいえば古歌だからこそ普遍性が獲得できて物語の要請に応えられるとする論理が働いているということである。このことは『平家物語』で古

歌とされた他の歌についてもいえることで、いずれも古歌とされることで原作者の個性から離れて、物語内で語られ描かれている内容に見合った和歌として再生し有効に働くようになる。一例に巻六「葵前」の章段にとられた平兼盛の「しのぶれど」と「歌についてみれば、この歌は天徳四年（九六〇）三月に催された「天徳四年内裏歌合」の歌である。勅撰集をはじめ多くの歌論書に引用され兼盛の歌としてあまりにも有名であるが、古歌として利用されることで高倉天皇の葵前への思いを代弁する情熱的な歌として再生している。物語内では歌合歌という詠作事情から離れ、高倉天皇の個人的な思いが実は恋する人間の抱く普遍的な思いなのだといったことを強調する歌として利用されているのである。

和歌というものが持っている普遍性に目をむけられた松尾葦江氏も、

和歌には感情の明確化、一般化をする働きがあることは前にふれた。事件の中で、情況のさ中での感情そのものは個別的であり、複合的で曖昧なものであるが、それに明確な命名をし、一般的に誰にでも想像できるかたちを与えるのは和歌の得意とするところである。事件のあと、作中人物は屢々和歌の形で反応を外に表わす。例えば宇佐八幡から芳しくない神意が62で示された時、宗盛が呟いたのが63である。<sup>(16)</sup>

と述べておられるが、個人的な俊成歌から普遍的な物語内和



歌へと飛躍する和歌の力を解き明かしてくれた御論であろうと考える次第である。和歌の力ということでは、先の時下氏の「古歌の古典的価値を尊信して、之れを神聖な場面に引用してゐる」という理解は、つまりは神詠に拮抗しうるものは古歌であるという理解だと言い換えてもいいであろう。

なお、この二首を贈答歌として論じられた松田珠美氏は、最後に、贈答歌としては、かなり異質な和歌をみておきたい。「緒環」の章段の

69 世のなかの うさには神も なきものを なに  
いのるらん 心づくしに

70 さりともと おもふ心も むしのねも よはり  
はてぬる 秋の暮れかな

では、夢想の告として宗盛の参籠が徒勞であることを論ず69の贈歌に対し、答歌は、『千載集』巻五に

保延のころほひ、身をうらむる百首歌よみ侍りける  
に、むしのうたとてよみ侍りける

として載る俊成の歌である。ここでは、68の神詠によるつきはなしを受けて、無力な我が身を恨み、しおれてしまふ気弱な宗盛像を俊成の歌を借りて描き出しているのである。69の歌が「心ぼそげに口ずさみ給ける」ものであり、歌もまた、借り物であることで、宗盛をいかに小心で卑屈な人物として描こうとしているかが判るはずである。

と詳細に論じておられるが、ここは、宗盛を小心で卑屈な人物として描くことが目的なのではなく、古歌であることで宗盛の個人的な思いは昇華され普遍化されて表出されていると見た方がよく、また宗盛という人物が物語内でそのように造形されているということとは別に、前引した諸論のように神にも見放された人間が矜持と憔悴の入り交じった複雑な思いを古歌に託して口ずさむというように物語られているのだと考える。

ところで、先に宇佐神宮よりの神詠と俊成歌とは贈答歌としてはその約束事に正式にはあてはまらない二首であることを述べたが、読み本系諸本にはこの神詠への返歌ではないかと思わせられる歌がとられている。すなわち、延慶本では巻八「十三、左中将清経投身給事」の章段に、

小松内大臣の三男左中将清経は最心苦しく被思ける人を置て都を出給ける時、西海の浪に溺なは再会其期を不<sub>レ</sub>知、何なる人にみへ給とも思出ては念仏申て、後世訪てたへと髪を切て形見に遣たりけるか、中将都を出給て後は風の便の音信も無りければ、女恨て彼の形見に一首をそへてそ遣しける、

みるたひに心つくしの神なれば宇佐にそかへすものと  
の社へ

実にやさしくあわれなりし事也、清経思われけるは都を源氏に被<sub>二</sub>追落<sub>一</sub>、鎮西をは伊栄に被<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>追何へ行は

可<sup>(18)</sup>遁遂一にかわとて閑に経よみ念仏して海にそ沈み給ける、

とある歌である。宇佐神宮よりの神詠「世の中の…」歌中の「うさ」「神」「心づくし」の詞を用いて、「心つくし」に「尽し」と「筑紫」を掛け、「うさ」を「宇佐」と「憂さ」の掛詞として用いているところも共通する。「神なれば」にも「神」と「髪」が掛けられていて技巧的である。両首は物語内では全く関係なく離れた場所で詠まれたものとなっているが、この二首を贈答歌として並べてみると恋する二人の思いの通じ合わない情況が立ち現れてくるようにもみえる。これを贈答歌として配置しようとしてうまくゆかず、俊成歌を古歌とすることで神詠に対置させて物語を進行させたのが語り本系ではなかったか。そんな構想に関わるような思いも膨らむ一首ではある。

また、読者が「さりとも…」歌を俊成の作であると知っているかどうかということも問題ではある。『平家物語』の読者にとって、もちろん作者（作者たち）にとっても、俊成は実は親しい存在であったはずである。俊成は、覚一本によれば宇佐神宮に参籠し夢想の告を受けた平宗盛が俊成歌「さりとも…」を口ずさむ巻八「緒環」まで章段数で六段程しか隔たらない巻七「忠度都落」の章段に登場する。落ちてゆく平家一門と離れて都へ引き返してきた平忠度が勅撰集（後の『千載集』）を編纂途中であった俊成邸を訪れ自詠の歌稿

を託し、俊成はその中から一首を「読人しらず」として撰入したという話である。この話は語り本系読み本系を問わず諸本に共通してとられている。諸本における俊成の描かれ方には差違があり、子細に検討すれば俊成の評価にもゆれがあるが、結論からいえば中村文氏が「忠度都落」の章段について覚一本と延慶本の叙述を比較しながら論じられ、

忠度が望んでいるのは、生涯を傾けて歌道に精進を重ねた結果である詠草を、和歌世界の権威を象徴する記号である俊成に見せることによって、確かに歌人として生きたことの承認を得ることであり、それは歌道に対する執着心のあからさまな吐露と言える<sup>(19)</sup>。

と述べておられる一文に示された、「和歌世界の権威を象徴する記号である俊成」という認識が勅撰集の撰者にもなった俊成に対する当時の大方の評価でもあったと考える。俊成の作であることを記したのでは俊成の個性の方が前面に出てしまい、物語としての進行を阻害する恐れがあった。俊成の名を冠してとりこむことはやはり憚られ、古歌とすることで俊成の個性から解放された和歌として物語内で働くことが期待されたのだとすべきであろう。

#### 四

俊成歌が古歌とされている語り本系での問題について考察を進めてきたために、詠まれた場所も違い古歌ともされていない

ない詠み本系諸本についての検討ができなかった。以下に簡単にではあるが現在の考えを記しておきたい。まず、物語の進行上、宗盛が柳浦で草むらの虫の音を聞いて述懐をする場面になったとき、現実の俊成歌の内容が虫の音を聞いて和歌を詠むという詠歌状況を暗示してため、俊成歌を宗盛の詠としてとりこんだのであろうということが考えられる。逆に『平家物語』の作者（作者たち）は、俊成歌の内容から読みとれる詠歌状況に見合う場面、つまり草むらの虫の音に宗盛が聴き入るといふ場面を設定したのかもしれない。また和歌を古歌とせず宗盛の述懐歌としたことで、虫の声に聞きいつている宗盛の個人的な嘆きが吐露されたのだと理解することも容易であり、物語内の和歌の働きという視点からみても個人の悲しみの発露として和歌が利用されたことは明白である。ただし、延慶本も長門本も歌の末の句が「秋の夕暮れ」となっていて、覚一本などのような「秋の暮れかな」とあるのに比べて詠嘆を表す「かな」が用いられていない分詠嘆性は薄れるようにみえる。場面上は秋の夕暮れの風景に見入っている宗盛の姿を彷彿とさせ、あたりの景色は宮中を思わせる風趣があると後文に述べているのと相俟って叙景歌的な趣も感じられるものとなっている。都を離れ九州の地を流浪しているという平家一門の抱いている悲しみは背景にあるものの、風趣を楽しむといった趣が底流に流れており物語の展開上はやや離れた感じもする。

和歌が物語にとりこまれる事情はそれぞれであろう。語り本系の問題に話を戻すと、宇佐神宮より神託を受けて宗盛が古歌を口ずさむという展開は、和歌の本来的に持っていた述懐性が俊成個人のものから宗盛のものへ、さらには宗盛のものから没落してゆく平家一門のものへと普遍化されてゆく状況が読みとれ、神詠に拮抗しうる古歌（俊成歌）を対置することで二首一對の物語場面が完成したともいえる訳で、語り本系諸本が俊成歌をこの場所にとりこんだ効果は大きいと考える。

最後に、語り本系には無く読み本系諸本に有るもう一首の俊成歌について簡単に触れておきたい。すなわち、北陸篠原で平家に戦勝した木曾義仲が、討ち死にをした齋藤実盛の首実検をする場面で、延慶本では巻七「十二、実盛打死する事」の章段に、

実盛年来兼光に申候しは、実盛六十に余て後軍の陣に向  
たらむにはしらかのはつかしからむすれはひむひけにす  
みをぬりてわかく見むと思也、其故はこれほと白髪に  
ていかほと榮を思て軍をはしけるそやと人の思わんも  
はつかし、其上敵も老武者とてあなつらむ事も口惜かる  
へし、又わかとのはらにあらそひて先をかくるもとな  
けなし、小野小町か老苦の歌に

さわにをうるわかなゝらねとをのつからとしをつむ  
にもそてはぬれけり

と云けむも理なりけりと申候しか、たわふれと思て候へはけにすみをぬりて候けるそや。<sup>(20)</sup>

とある歌である。この歌も俊成が二七歳のころに詠んだいわゆる「述懐百首」中の一首で、私家集『長秋詠藻』に収められている(一〇六番、第三句「徒らに」)。また、『新古今集』卷一春歌上にも入集して、

述懐百首歌よみ侍りけるに、若菜 皇太后宮大夫俊

成

沢におふるわかかなならねどいたづらにとしをつむにも袖

はぬれけり<sup>(21)</sup>(一五)

となっている。『平家物語』では俊成歌ではなくて小野小町の作として利用されている訳である。もっとも源平盛衰記にもとられていて、そこでは「されば俊成卿述懐の歌に」<sup>(22)</sup>(卷三十「実盛討たる附朱買臣錦の袴並新豊県の翁の事」と正しく紹介されている(第三句「徒らに」)。この場合、老人である実盛の心境を代弁するためには、俊成歌として正しく紹介されても若年の身で不遇を嘆いている歌として理解されるのでは困る訳で、老残の姿を託ったといわれる小野小町の歌とした方が物語進行のためにはよさそうにみえる。ただし、俊成歌には物語内で話題の中心になっている白髪を思わせる語句は無いのだから延慶本の方がいいとも単純にはいえない。物語において個人の和歌が他人詠として利用されるという現象には、古歌として利用される場合と似て非なる問題もあ

るように思われるが他日を期したい。

注

- (1) 新日本古典文学大系45『平家物語 下』(梶原正昭・山下宏明氏校注、岩波書店、一九九三・一〇)による。傍線は論者。以下同じ。
- (2) 山下宏明氏編『八坂本 平家物語』(大学堂書店、昭和五六・六)による。
- (3) 『新編国歌大観』第一卷所収の『千載和歌集』による。
- (4) 小論に直接引用しなかったが参考にさせていただいた御論は以下のとおり。  
鍛冶光雄氏「平家物語における和歌の機能的考察・上」(湘南国文学、一二号、昭和五三・三)  
信太周氏『平家物語』の和歌―伝承と創作をめぐる諸問題―(武蔵野文学、三三集、昭和五九・一一)  
小野美典氏「平家物語卷八前半部の記事配列と和歌―覚一本の宇佐神詠と月見歌群を中心に―」(『一の坂川・姫山 国語国文論集』、笠間書院、平成九・五)
- (5) 鍛冶光雄氏「平家物語における和歌の機能的考察・下」(湘南国文学、一三号、昭和五四・三)
- (6) 富倉徳次郎氏校注・訳『平家物語全注釈』中卷(角川書店、昭和四二・五)
- (7) 吉澤義則氏校注『応永書写延慶本 平家物語』(勉誠社、昭和五二・一二復刻版)
- (8) 参照した諸本は以下のとおり。  
語り本系・覚一本Ⅱ注(1)、葉子十行本Ⅱ注(6)、流布本Ⅱ佐藤謙三氏校注『平家物語 下卷』(角川書店、昭和三四・九)、

八坂本Ⅱ注(2)、百二十句本Ⅱ新潮日本古典集成『平家物語中』(水原一氏校注、新潮社、昭和五五・四)、鎌倉本Ⅱ山岸徳平氏他編『鎌倉本 平家物語』(汲古書院、昭和四七・九)。

読み本系…南都本Ⅱ松本隆信氏編『南都本 南都異本 平家物語・上』(汲古書院、昭和四六・一〇)、延慶本Ⅱ注(7)、長門本Ⅱ古典資料研究会編『平家物語 長門本(五)』(藝林社、昭和四九・八)、源平盛衰記Ⅱ水原一氏校注『新定源平盛衰記(四)』(新人物往来社、一九九〇・二)

(9) 久保田淳氏「平家物語と和歌」(解釈と鑑賞、三二卷一〇号、昭和四二・九)

(10) 久保田淳氏「平家物語と和歌」(『諸説一覽平家物語』、明治書院、昭和四五・六)。作者の欄に「古歌」とあるものを抄出すると合計五首となるが、前引の御論では六首とあり、もう一首は「八雲たつ」の歌だと思われるので、都合六首を一覧表として引用した。

(11) 弓削繁氏「平家物語の和歌に関する一報告」(名古屋大学軍記物語研究会会報、一号、昭和四八・五)

(12) この二首を贈答歌として論じたものに松田珠美氏の「覚一本『平家物語』の和歌に関する一考察」(皇学館論叢、二五卷一号、平成四・四)がある。なお、中村文氏は「平家物語と和歌―平家都落の諸段をめぐって―」(『平家物語・受容と変容―あなたを読む平家物語 4―』(有精堂、平成五・一〇)所収)において、覚一本の「経正都落」をとりあげ、守覚法親王と経正との贈答歌は贈答歌における約束事が守られていないことを指摘されている。また中村氏の御論を引用しながら「経正都落」の贈答歌の問題に言及されたものに小野美典氏「平家物語『経正都落』考―覚一本と延慶本の和歌受容の方法―」(語文、九二

輯、平成七・六)がある。ともに、示唆されるところが多かった。

(13) 杉本圭三郎氏校注・訳『平家物語全訳注』第八卷(講談社、昭和六二・一二)

(14) 時下米太郎氏「平家物語に見ゆる和歌」(国語と国文学、九卷一一号、昭和七・一一)

(15) 小松茂人氏「平家物語と和歌」(聖和、六号、昭和四一・一〇)

(16) 松尾葦江氏「覚一本平家物語の和歌―平家物語の時間・その二―」(『平家物語論究』、明治書院、昭和六〇・三)。62は「世の中の…」歌を、63は「さりとも…」歌をさしている。

(17) 注(12)の松田珠美氏論文

(18) 注(7)に同じ。清経入水譚にまつわるこの歌は、話の内容は繁簡であるが南都本、源平盛衰記(初句「見るからに」、第五句「もとの社に」)もとられている。長門本には無い。

(19) 注(12)の中村文氏論文

(20) 注(7)に同じ。南都本、長門本には無い。

(21) 『新編国歌大観』第一卷所収の『新古今和歌集』による。

(22) 注(8)の水原一氏校注『新定源平盛衰記(四)』による。